

一八八三年四月七日(土)

バララームの礼拝室でナレンドラ、ラカールたち信者と共に

タクール、聖ラーマクリシュナ、ナレンドラたちと共に楽しく讚神歌をうたう

聖ラーマクリシュナは、バララームの邸の応接間から北東にあたる部屋で信者と共に坐っておられる。時間は午後一時ころ。ナレンドラ、バヴァナート、ラカール、バララーム、校長たちがタクールの傍に坐っている。

今日は新月。土曜日。四月七日(チャイトロ二十五日)、一八八三年。タクールは早朝からバララームの邸に来ておられて、今しがた昼食の供養を受けられたところである。ナレンドラ、バヴァナート、ラカールとほか、二、三の信者を招待するようにと、タクールはバララームにおっしゃっておられた。そこで、彼等もここで食事をとった。タクールはバララームによくこう勧められる——。この若者たちに御馳走しろ。そうすれば、修行者に供養することになるから。(訳註——出家や修行者に供養するのは大へんな功德になる)

数日前、タクールはケーシャブ氏の邸に、シナヴァ(新しき)・プリンダーヴァンという劇を見物に

行かれた。ナレンドラとラカールも行った。ナレンドラは劇に出演した。ケーシヤブはバオハリ・ババの役になって出た。

聖ラーマクリシュナ、ナレンドラたちに向かつて――

「ケーシヤブは修行者の役になって、(訳註)シヤーンテイ・ジャル(平和の水)を撒まいていた。わたしは、しかし、こういうことはどうも好きじゃないね。芝居のなかでシヤーンテイ・ジャル(平和の水)だつて！ それから、誰だつたか(K氏)、罪人の役をしていた。こういう役をするのも良くないな。自分ではんとに罪なことをするのもよくないが、芝居で罪人の役をするのもよくない」

ナレンドラは身体の調子がよくなかったが、タクルが彼の歌をぜひ聞きたいと望んでおられた。この御方はこんなふうにおっしゃる――「ナレンドラ、ほら、みんなが言っているよ。さあ、ひとつ歌っておくれよ」

ナレンドラはタンプーラ(弦楽器)を持って伴奏しながら歌つた――

いざ歌え

(訳註)シヤーンテイ・ジャル(平和の水)――ドゥルガー・ブージャヤガネーシャ聖誕祭などのような神像を祀つた祭典の終わりにはヴィサルジャンと呼ばれる儀式があり、土で作られた神像は川や海、ベンガルではガンジス河に流され自然に還つていきます。このとき神像が沈められた場所の水をシヤーンテイ・ジャル(平和の水)と言ひ、祭典の締めくくりとして持ち帰り、信者たちに神様の祝福として振りかけられます。

1883年4月7日(土)

わが生命いのちの籠かごに住む鳥よ  
万願成就のプラフマンの  
樹にとまりて いざ鳥よ

歌えよ 歌え

主を讃えて 高らかに歌え

ダルマ アルタ カーマ モクシヤ  
正義、富、愛、自由

熟れし四つの実をたべよ

歌えよ 語れよ

内なる無上のよろこび歡喜を

生命の永遠の息吹きとを

わが胸にすむ いざ鳥よ

歌えよ 声も高らかに

叫べよ 渴かわきしチャタク鳥の如く

絶たぎゆることなく

歌えよ 歌え

次の歌

大宇宙の主にして絶対の歡喜なる

ブラフマンは無上の光輝かができ

始めなき初め 生命の生命

次の歌

おお 王のなかの王よ 頭あたまれ給え

わがたましいは君の御足を

伏し拝みて 御恵みめぐみを乞こうなり

この身は世間の劫火けつに焦げ

この胸は罪けがに汚けがれ さび腐る

まぼろしを追おいて疲れ果て

死ぬばかりなり 大悲の神よ

おん目を向け 憐あはれみ給え

浄め給え 力を与え給え

次に彼は

「み空の盆に 日と月の 妙なる灯火 もえさかり」と「智慧の大空に 愛の満月 さしのほりぬ」  
を歌った。

ナレンドラは歌い終わった。

タクルルは、こんどはバヴァナートに歌えとおっしゃったので、彼は歌った。

主よ 慈悲ふかく なつかしの君よ！

よろこびの時もわれと共に

かなしみの時も共にありて

罪と恐れを消したもう友よ

災いに満てるこのおそろしき世の

荒海こえる舟の舵とり

情欲の渦をたくみにさけて

みちびき給うか たのもしき君よ

胸焦がす悔みの火に 君のゆるしは  
涼やかな水を注ぎ わが心安らかに

人みなに見捨てられたとき 死にゆくときも  
我をあなたかく抱き給う やさしき君よ

ナレンドラがにこにこしながらタクールに話しかける――

「このバヴァナートは、ベテルの葉と魚を断っているのですよ」(訳註、ベテルの葉――修行を妨げる贅沢品と考えられ、多くの修行者はこれを口にしない)

すると、聖ラーマクリシュナはバヴァナートに向かって笑いながらおっしゃった。

「どうしてだい？ ベテルと魚がどうしたのかい？ あんなもの、何の害にもなりやしないよ！ 女と金を断つことがほんとの捨離だ。」

ラカールはどこにいる？」

一人の信者「はい、ラカールは寝ております」

聖ラーマクリシュナ「あははは――ある人がゴザをかかえて芝居を見に行つた。まだ始まらないのでゴザをひろげてひと眠りした。起き上がったときには芝居はみんな終わつていた！ (一同笑う)

仕方がないからゴザをかかえて家へ帰つたとき、ハッハッハ」

ラムダヤールは身体の具合が非常によくなかった。それで別室でふせていた。タクールはその部屋に行つて彼を見舞われた。

〔十五の理——ヴェエーダーンタの經典と聖ラーマクリシュナ——世間のことと經典の意圖すること〕

四時近くになった。こんどは応接間で、ナレンドラ、ラカール、校長、バヴァナート、その他の信者たちとタクールは坐つておられる。数人のブラフマ協会員が入つてきた。彼等を相手に話が始まつた。

ブラフマ協会員「せんせいは、パンチャダシー(十五の理)といふのを、ご存知ですか？」

聖ラーマクリシュナ「むかし、はじめのころ聞いたよ——修行のはじめのうちは、そういうものもよく勉強しなければならぬが、後になると——

いとしきシャーマ胸に抱き

やさしき御母見えるのは

心よ おまえとわたしだけ

外の誰にもわからない

修行の途すがらは、そういう本の講義を聞いたりもしなければならぬ。あの御方をつかんだ後は、智慧に不足はない。宇宙の大実母がじきじきに教えて下さる。はじめのうちは一字ずつ綴りながら

言葉を書くが、やがて、自然に手が動くようになる。

金細工師は、金を溶かすときは大忙しだ。片手でフイゴを動かして、片手ではウチワを使い、口にはクダをくわえている。金が溶けるまでの間だよ。溶かしてから型に入れてしまえば、あとは安気なものだ。

経典を、ただ読むだけではだめだよ。女と金のなかに暮らしては、経典の核心は理解できない。世間への執着心が、智慧の火を消してしまうのだよ。

あこがれ望んで詩の色々を学びしが

黒いの(クリシユナ)にぞっこん惚れて皆塗りつぶしぬ(一同笑う)

タクルルはブラフマ協会の会員たちと、会長であるケーシャブのことについていろいろお話しになった――

(訳註2)バンチャダシー(十五の理)——十四世紀にマータヴァア(別名ヴィディヤラニセ)によって著されたアドヴァイタ・ヴェーダーンタ(不二元論)の哲学書。五節ごとの三部全十五節で構成された韻文によるアドヴァイタ・ヴェーダーンタの入門書である。余談ではあるが、ヴェーダーの注釈者として著名なサーヤナとは兄弟である。スワミ・ヴィヴェーカーナンタによると、近代インド学・仏教学の基礎を確立したドイツ人のマックス・ミュラーはそのサーヤナの生まれ変わりで、未完に終わったヴェーダーの注釈を完成させる為に転生して来たのだということである。



「ケーシャブの場合は、ヨーガとポーガ（世の苦楽）の両方だ。社会生活をしながら、心は神様の方に向いている」

会員の一人が、カルカッタ大学における学者たちの大集会の模様を話した——「まるで、人間のジャングルでした！」

聖ラーマクリシュナ「大ぜい人が集まっているのを見ると、神様への想いかられる。わたしがそれを見たら、きつと夢中になってしまったらうよ」